3時間目

高校教育

座って待って聞くだけでなく自ら考え、生徒同士が学び合う授業に高校教育は変わりつつあるんです。

さて、問題です!!

9カ国の18歳に聞いた意識調査で、「自分で国や社会を変えられると思う」と答えた日本の18歳は何%?

＊ちなみにインドの18歳は83.4%、アメリカは65.7%

出典:日本財団「18歳意識調査−国や社会に対する意識-」2019年　調査対象国:インド・インドネシア・韓国・ベトナム・中国・イギリス・アメリカ・ドイツ・日本

右のQの答えはなんとわずか18・3%。対象の9カ国で歴然たる最下位です(図5)。「何かを成し遂げられる」という自己効力感が、日本の若者はなぜこんなに低いのでしょう。そこには教育の責任があると痛感します。だからこそ、日本の教育は変わろうとしています。

これまで高校は、大学に入るための教育をする場だと捉えられがちで、難関大学に何人進学させたかで高校の価値がランキングされることもしばしばでした。しかしもちろん、大学進学だけが高校教育の目的ではありません。大学の先の社会まで見通して、自分のもっている力をどれだけ社会で使える力にしていくかを身に付ける場が高校なのです。

本校(大妻嵐山中学・高校)の説明会でも、大学への進学率を気にされる保護者の方が多かったのも事実です。けれどこういう話を私がすると「社会に出てからのことも考えなければいけないのですね」という感想を書いてくださる方がここ最近とても増えてきました。

高校は、大学に入るためだけの教育をする場ではないんです

社会が求める力を育むために授業は変わり始めている

では、高校はどう変わっていったらいいのか。

社会で役立つ力を育むために、これからの社会はどう変化していくかを考え、そこで求められる力は何かを国全体で考えたのが、新しい学習指導要領です。

時代の変化が速すぎて予測ができないのであれば、どんな時代になっても生き抜ける力が必要です。物事を知っているだけではダメで、知っている知識を使い、自分の頭で考えて、身近な課題を解決していく力が求められていきます。

私が生徒たちにいつも言っているのは「知ること、考えること、行動すること」の3つの力が大事だということ。学習指導要領で言われ

でも、わが子が大学に入れなかったら困るよね…

Profile
大妻嵐山中学・高校(埼玉・私立)
校長
真下峯子先生

奈良女子大学理学部生物学科卒業。上越教育大学大学院学校教育研究科修了(教育学修士)。埼玉県内の公立中学校・県立高校で生物教員として従事し、埼玉県立総合教育センター主席指導主事、県立高校長などを経て、2014年より現職。

取材・文／長島佳子

「主体的・対話的で深い学び」の授業

上：仲間と協働して意見交換することで、自身を相対化できる（奈良女子大学附属中等教育学校の一例）。中：個人で頭をフル回転させ、考えたことを先生や仲間に話してアウトプットする（福井県立若狭高校の一例）。下：自分で考えた英語文をみんなの前で発表し、お互いの良い点を伝え合う（北海道立釧路東高校の一例）。

アクティブなんちゃらとか
「探究」って何？ 探検隊？

保護者時代の授業だけでは身に付かない力があるから変わるんです

ている資質・能力の三つの柱（10ページの図3）はそういうことだと私は捉えています。

考えて行動することまで網羅しようとすると、従来のように先生からの講義型の授業だけでは身に付けることができません。だから今の学校は、「アクティブ・ラーニング」（以下、AL）や「探究」の授業に意欲的に取り組もうとしているのです。

自分から学ぼうとする力を育むのがALのねらい

ALとは「主体的・対話的で深い学び」のことです。「主体的」とは子どもたちが興味をもって、学びに取り組む姿勢。「対話的」とは、先生からの一方通行ではなく、仲間や先生、地域の人々などと対話し、意見交換することで、自分にはなかった新たな発見をすること。「深い学び」とは、もっている知識を結びつけて、問題の解決策を考えたり、新しい考え方を生み出すことです。

難しく言いましたが、保護者の方々には「先生が教えてくれることを子どもたちが待って、黒板に書かれたことをそのままノートにとって覚える授業ではありません」と説明しています。

私の学校では、中学受験の説明会に来る小学生たちに、ALを体験してもらっています。模擬授業をするということではなく、冒頭で「今日の説明会でメモをとってください。そしてメモをとったことを保護者の人に話してみてください」と言います。人の話をメモするには、聞いて、何が大事な部分かを自分で考えて判断し、書き取る力が必要で、さらにそれを人に伝える＝行動することまでの一連の体験ができます。それは社会に出てからも必要となる、基本的な力ですよね。それがALのねらいです。アウトプットしなければならないので、わからないことがあったら質問したり、調べたりと、待っているだけでなく自分から学ぼうとしないとできない学び方なのです。

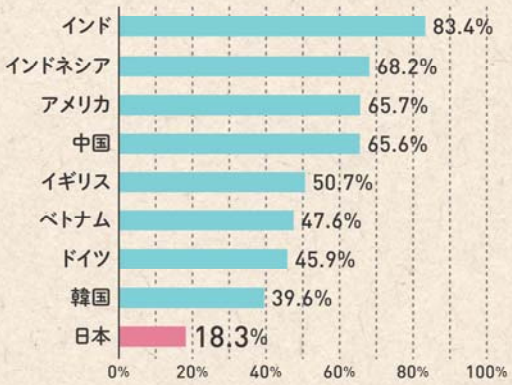
自ら課題を見出し、解決策を探る〝探究〟

探究とは、世の中にある課題を解決するための基礎的な力を育む、社会生活につながる授業です。従来の「総合的な学習の時間」に代わって「総合的な探究の時間」としてスタートしています。

まずは自分と向き合って、何について探究するか自分の興味関心を考えて、解決すべき課題を探します。課題が決まったら現状や解決につながることについてさまざまな方法で調べて、集めた情報を分析して、自分なりの解決策を発表するのが基本的な流れです。自分なりの答えでいいので、正解はありません。

探究の授業の進め方もさまざまで、個人で進める場合もありますし、グループで行う場合もあります。グループで探究を進めることで、仲間と共に物事に取り組む協働性が身に付くだけでなく、グループ内で役割分担することで、自分や仲間の得意分野に気付くことができます。

図5 自分で国や社会を変えられると思う
（「はい」の回答者割合）各国のn=1000



出典：日本財団「18歳意識調査-国や社会に対する意識-」2019年

実は私も
うちの子天才なんじゃ?
と思うときある!

子どもたちはすごい力をもっている 皆さんはそれを引き出せていますか?

また、課題や解決策は学校の中だけで見つけることは難しいため、地域の協力をいただいて外に出て学ぶ機会を取り入れている学校も多いです。探究に限りませんが、今はボランティア活動やインターンなど学校の外に出て行く活動が保護者の皆さんの時代よりも増えています。校外の人々と関わることで、学校にいるだけでは気付けなかった自分の存在価値に気付き、ガラッと成長して帰ってくる生徒も実際に大勢見てきました。

探究の授業で行われている事例

上：課題を発見するために、自分の興味をマッピングして考えていく（岩手県立大船渡高校）。中：探究のテーマを地域課題から取り組み、学校外の人との関わりから学ぶ（長崎県立五島高校）。下：探究の成果を発表し、生徒同士で質問し合うことで次の課題を見つけられる（京都市立堀川高校）。

子どもがもつ多様な力を引き出すのが今の学校の役割

ALや探究は、これから必要になる資質・能力を育むためのものです。でも私はそれだけではないと思っています。今までやっていなかった授業方法によって、子どもたちが元々もっていたのに見えていなかった多様な力に光が当たり、見えてくる。つまり、資質・能力は子どもたちが本来もっている力で、それを引き出してより伸ばそうとしているのが今の授業なのです。

新しい学習指導要領はまさにそのことを求めているので、今、全国の学校もその方向に動いています。

多様な評価軸によって子ども自身が自分の力を発見

多様な力が求められることにともない、子どもたちに対する評価軸も多様になっています。大学でもAO・推薦入試（2021年度からは総合型選抜、学校推薦型選抜に改称）などで従来の学力に限定しない評価方法が既に実施されていますが、その傾向は今後ますます高まっていくことでしょう。

多様な力を育むには、生徒を集団で見るのではなく一人ひとりをきちんと見る、個別最適化が大事だと思っています。個別指導するということではなく、プロセスや取組の姿勢、到達度なども評価するということです。

知識・技能以外を測る方法も多数開発されています。私の学校では、タブレットなどのICT（情報通信技術）を授業だけでなく、子どもたちの「学びに向かう力」を測るためにも利用しています。学習の取組状況や達成状況をデータ化できるのです。eポートフォリオという、生徒たち自身が学びの足跡をタブレットなどで記録するものもあります。これらのデータを基に各先生の人間的な評価によって、一人ひとりに合った学び方を提供できるようになると思います。

このような授業や評価方法の変化によって、子どもたち自身が自分で気付いていなかった自分の力に気付けるようになることに、私は大きな期待を寄せています。そのことこそが、子どもたちの自己効力感や自己肯定感を高めることにつながると思いませんか。

↓保護者に求められること

高校生は保護者に愛されたいと思っています。子どもたちが不安になるのは「勉強ができないと保護者に愛されない」と思うから。保護者も多様な評価軸で子どもを見てあげると自己肯定感や自己効力感が一層高まりますよ!

子どもたちは
「自分の得意」に
気付けば伸びます!